

2021年3月7日 礼拝説教要旨

詩編講解説教51「新しい創造」

詩編51：7～14、Ⅱコリント5：17

詩編第51編を読む時に、どうしても避けて通ることができない話があります。ご存知の方も多いと思いますが、ダビデが自分の部下ウリヤの妻バト・シェバを自分のものにするためにウリヤを戦いの最前線に送り戦死させ、そしてその妻を奪うという普通の人間でも考えられないような大罪を犯した。その罪を預言者のナタンが来て叱責すると、ダビデは罪を認め「わたしは主に罪を犯した」と告白します。するとナタンは「主があなたの罪を取り除かれる」と言います。この物語が詩編第51編の背景にあります。

ダビデは取り返しのつかない過ちを犯しました。弁解の余地はありませんし、到底赦されるものではありません。わたしたちはダビデがひどい人間だと思ってしまうでしょう。まだ自分はましだと考える。でもそうでしょうか。ダビデは自分の王という立場、権威、力を利用して欲望の赴くままに行動した。これが自分を神にする、自己神格化ということであり、罪の典型的な姿です。そういう思いはわたしたちの中にもないでしょうか。わたしたちも自分に力があると勘違いして、思い通りに人を動かそうとしたり、支配するようなことはないでしょうか。家庭において、職場において、小さな人間関係の中でも、わたしたちは実はダビデのように振る舞っていることがあるのではないのでしょうか。またわたしたちのそういう小さい行動が積み重なって人との関係も壊れてしまうのではないのでしょうか。

この第51編は罪の性質を知る上で非常に重要な御言葉です。「わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです」（7節）ここは「人は生まれながらに罪びと」という原罪の教理の根拠となっているところです。ここで重要なことは、罪というのは人間の生き方の問題ではないということです。存在そのものの問題。生き方なら自分で改めるとか、努力して矯正することを期待するでしょう。しかし「母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあった」のです。それは自分で矯正できるものではない。すでに自分の力が及ばないところにある問題、神さまが解決してくださらなければ解決されない問題なのです。

それゆえに詩人は言います。「神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください。御前からわたしを退けず、あなたの聖なる霊を取り上げないでください。御救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください」（12～14節）「創造」（バーラー）という言葉は創世記の第1章1節にある「神は天地を創造された」と同じ言葉です。この天地万物をお造りになられた神さまがもう一度わたしたちを新しく造り変えてくださらなければ罪は決して解決されない。しかもここに「新しく確かな霊」「聖なる霊」「自由の霊」と「霊」（ルーアハ）という言葉が繰り返されているように、これも天地創造の「神の霊」（創世記1：2）であり、あの人間の創造の時に、神さまが「命の息を吹き入れられた」（創世記2：7）「命の息」にも通じています。そのような神さまご自身の創造の御業が行われなければ、わたしたちは決して罪から自由になることはないのです。

そしてこの新しい創造こそ、イエス・キリストがもたらしてくださった救いに他なりません。キリストが十字架においてこの罪を担い、これを贖ってくださいました。そして三日目によみ

がえられて、罪に打ち勝った新しい命をそこにもたらししてくださいました。わたしたちは洗礼を受けてこのキリストに結ばれて、新しく造り変えられていくのです。「キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(Ⅱコリント5:17)キリストによって新しく生まれ変わることを。神さまはそのことを求めておられます。

この詩編第51編では「洗ってください」「ぬぐってください」という言葉があります。テトスの手紙に「この救いは、聖霊によって新しく生れさせ、新たに造りかえる洗いを通して実現したのです」(3:5)「新たに造りかえる洗い」というのは洗礼を意味しています。洗礼の時に水が使われますが、ちょうど水で手を洗うと汚れが落ちるように、キリストによってわたしたちの罪が洗い清められることを表しているのです。ちょうど教会は受難節の中にありますが、主イエスが最後の晩餐の時に弟子たちの足を洗われたところを思い浮かべてくださってもよいでしょう。主イエスは自らの手で弟子たちの足の汚れを洗い、これをぬぐってくださいました。まさにキリストはそのように僕として仕えられ、十字架で死んでくださった。それによってわたしたちの罪は洗い清められたのです。

先日、同じ九州の若い牧師たちと教会の議事録を読みながら、いろいろな話をする機会がありました。一つ話題になったのが説教題でした。説教にどういう題をつけるのか。結構こだわる先生もおられるようです。実際に説教題を見て礼拝に来られたという人がいて、その時の説教題が「頑固な汚れ」という題だった。その題を見て来た人はどういう話を期待したのでしょうか。愉快的な話ですが、しかし罪の汚れは本当に頑固です。洗濯物なら洗剤で頑固な汚れも落ちるでしょう。でも罪の汚れは洗剤では落ちない。尊い神さまの独り子の命が献げられなければ落ちない汚れなのです。でもその汚れを神さまは洗い清めてくださいました。だからわたしたちはまたやり直すことができるのです。

最後にハイデルベルク信仰問答を引用して終わります。

問70キリストの血と霊とによって洗われるとは、どういうことですか。

答 それは、十字架上の犠牲において、わたしたちのために流されたキリストの血のゆえに、恵みによって、神から罪の赦しを得る、ということです。さらに、聖霊によって新しくされ、キリストの一部分として聖別される、ということでもあります。それは、わたしたちが次第次第に罪に死に、いっそう敬虔で潔白な生涯を歩むためなのです。